

変化するリアリズム—ネオクラシカル・ リアリズムの“発見”（下）

島 村 直 幸

六 ネオクラシカル・リアリズムの“発見”後のさまざまな研究動向

ネオクラシカル・リアリズムの“発見”後に、さまざまな研究業績が蓄積されてきた。主要な研究業績を紹介しておく。たとえば、二度の世界大戦以前の英仏両国による脅威認識の政治と同盟形成について、シュウェラーが『答えられない脅威』、ロベルが『覇権の挑戦』をまとめている（Scweller, 2006; Lobell, 2003）。ディヴィッドソンは、『現状変革国家と現状維持国家の起源』で、一九二〇年代から一九三〇年代のイタリアの現状変革のグランド・ストラテジーの起源を論じている（Davidson, 2006）。タリアフェロは、周辺地域でのワイマール共和国のドイツと大日本帝国、アメリカの介入について『バランスするリスク』をまとめている（Taliaferro, 2004）。特に台頭する大国の意図と能力を評価する上でのディレンマについては、いくつかの研究がある。たとえば、シュウェラーの「利益のためのバンドワゴン」¹と「危機の二〇年、一九一九—一九三九年」である（Scweller, 1994: 2001）。個人の指導者とイデオロギーのグランド・ストラテジーに対するインパクトについて、バイマンとポラックの論文「偉大な人物たちを賞賛しよう」²がある（Byman and Pollack, 2001）。

大国間戦争後に持続する国際秩序を形成する大国の能力に対する国内政治の制約については、リップスマンが『民主主義による平和維持』³をまとめて

いる (Ripsman, 2002)。「封じ込め」政策の起源と一九四〇年代から一九六〇年代にかけてのアメリカの西ヨーロッパへのコミットメントの展開については、マクアリスターやデュエック、レインらの研究がある。(McAlliser, 2002; Dueck, 2006: ch. 4; Layne, 2007: chs. 3-5)。相対的なパワーのシフトとグローバルな戦争の変化する性格、一九八〇年代の深刻な相対的な衰退についてのソ連の指導層の反応への国内の制約との間の相互作用について、ブルックスとウォルフォースの論文「パワーとグローバリゼーション、冷戦の終結」がある (Brooks and Wohlforth, 2000/2001)。

北朝鮮の核兵器をめぐる国際的危機に対するアメリカと日本、韓国の戦略については、チャーが論文をまとめている (Cha, 2002)。一九七三年のブレトンウッズ体制の崩壊後のアメリカの通貨政策の展開については、スターリング・フォーカーの研究がある。『国際協調の理論と無政府状態の優位』である (Sterling-Folker, 2002A)。プッシュ・ドクトリンと二〇〇三年のイラク戦争の起源については、レインとドゥエックが比較的詳しく議論している (Layne, 2007; Dueck, 2006)。シュウェラーは、ネオクラシカル・リアリズムの有用性を議論しつつ、特に同盟研究への示唆を論じている。論文「ネオクラシカル・リアリズムの進歩的なパワー」と「同盟についての新しいリアリストの研究」である (Schweller, 2003; 1997)。シュウェラーは、希少な資源をめぐる大国間対立についても論文をまとめている (Schweller, 1999)。ネオクラシカル・リアリズムとコンストラクティヴィズムの間の存在論的な収斂の可能性については、特にスターリング・フォルカーが論文「リアリズムとコンストラクティヴィストの挑戦」と「リアリスト・コンストラクティヴィズムと道徳性」で議論を展開している (Sterling-Folker, 2002a; 2004)。

ロベルとリップスマン、タリアフェッロ編集の二〇〇九年の論文集『ネオクラシカル・リアリズムと国家、対外政策』は、タイトルの通り、国際システム・レベルの独立変数と特定の対外政策の従属変数の間に、媒介変数として、特に「国家」を位置づける。リアリズム、特にネオリアリズムにとって、国家の概念は、定義があいまいなままであった (Buzan, Jones, and Little,

1993; Cox, 1986; Ruggie, 1986; Spruyt, 1994; Wendt, 1992)。ネオクラシカル・リアリズムは、国家の概念の定義をより明確なものにしようと試みる (Taliaferro, Lobell, and Ripsman, 2009: 13; Desch, 2006)。ナショナリズムの高揚や世論のインパクト増大による国家の社会に対する自律性の低下は、古典的リアリズムがすでに問題視していた (Morgenthau, 1948: 220-223, 248-259; Kissinger, 1957: 324-330)。また、たとえば、一九世紀末から二〇世紀初頭の大英帝国の相対的な衰退という長期的な趨勢（トレンド）は適切に評価するには困難をとまなう。適切なパワーの評価をめぐる政策決定者の間の議論は、戦略的な適応をますます困難なものとしうる。ウォルフォースが『捉え難いバランス』で強調する通り、国家のパワーは捉え難いものであるからである。

パワーは、テストすることができない。パワーの異なる要素は、異なる時に異なる有用さを持つ。認識されたパワーと物質的な資源との関係は、不規則で信頼できないものである。パワーの力学は、不確かさに満ち満ちている。それぞれの国家は、異なる転換率と比較優位を持つ。認識された威信のヒエラルキーと軍事力の分布は、長い期間において、一致しないかもしれない。それぞれの国家は、自らの立場を最大化し、ライバル国のパワーを最小化するために非対称の戦略を採用する。シグナルは、同盟とライバル国、国内政治のアクターの間で混乱しがちである (Wohlforth, 1993: 306-307)。

長期的な趨勢に加えて、パワーの認識へのフィードバックは、前方の同盟の敗北や予期せぬ危機のエスカレーションといった外生的な衝撃という形で生まれることがある。たとえば、クリステンセンが指摘する通り、一九四七年春のイギリスの疲弊は、トルーマン政権に衝撃を与え、力の分布が双極になった現実を認識させ、封じ込め政策を立案させることになった (Christensen, 1996: 22)。一八九八年四月二五日に勃発した米西戦争でのアメリカの勝利

は、アメリカの国力の増大を認識させる機会となった。逆に、日本軍による真珠湾奇襲攻撃や「九・一一」同時多発テロ攻撃は、本土の脆弱さを認識させる機会となる一方で、ヴェトナム戦争での敗北は、アメリカに軍事力の限界を認識させる機会となった (Jervis, 1998: 125-176)。

シュウエラーは、たとえば、社会の役割を気紛れで稀なもののみなし、システム上の意外な逸脱を説明するだけである、と指摘する。これに対して、デュエックによれば、社会の諸力は対外政策に一貫して影響を及ぼすが、その影響は政策の内容というよりもむしろ政策の選択肢のスタイルや形態に限定されるという。ロベルやブラウレイ、フォードハムは、国内の利益の役割を対外政策の選択肢を形成する上で浸透性があり、強力なものである、と想定する。リップスマンやタリアフェッロ、ステーリング・フォルカーは、社会の諸力が対外政策の選択肢と履行に影響を及ぼす条件を仮定する理論を構築しようと試みる (Taliaferro, Lobell, and Ripsman, 2009: 32)。

戦略的な適応の過程は、力の分布の差し迫ったシフトや、他国と非政府アクターの意図の変化、あるいは既存の戦略が次善のものか逆効果なものとなりうるフィードバックに対する政策決定者たちの認識から始まる。しかし、ネオクラシカル・リアリズムは、国際的な制約に対する政策決定者たちの認識と計算や、政策決定者たちの間でのコンセンサスの欠如が、しばしば最終的な評価を歪めてしまうことがある、と想定する。さらに、たとえ政策決定者たちが国際的な脅威の性質と重要性を正しく認識したとしても、国内政治のダイナミクスが彼らにほぼ間違いなく逆効果な対外政策や安全保障政策を遂行させることがありうるという (Taliaferro, Lobell, and Ripsman, 2009: 32)。

ロベルは、ネオクラシカル・リアリズムの視角から「複合的脅威同一化モデル (complex threat identification model)」を設定し、二度の世界大戦の前のイギリスのドイツに対する脅威認識を事例に議論を展開している。ロベルは、ネオリアリズムの勢力均衡論とは違って、国家は国際的な力の分布での相対的なシフトだけではなく、他国のパワーの差異や物質的な能力の特定の

変化するリアリズム—ネオクラシカル・リアリズムの“発見”（下）

構成要素での変化にも対応する、と指摘する。ロベルによれば、グランド・ストラテジーの形成に携わる政策決定者たちや社会の主要なエリートの間での認識の不一致は、脅威認識と最終的には戦略的な適応に影響を及ぼす。結果として、ネオリアリストの勢力均衡や脅威の均衡の視角からは逸脱したように見えるグランド・ストラテジーを追求することになるという。

ロベルの複合的脅威同一化モデルは、主要な政策決定者たちが国際政治と国内政治が交差する立場に立っているという仮定から議論を始める。こうした政策決定者たちは、グローバルもしくはリージョナルなレベルでの勢力均衡の変化の評価を含めて、グランド・ストラテジーの立案に主要な責務を持つ。しかし、政策決定者たちは、国内のさまざまな経済セクターや国家アクター、利益集団といった社会のエリートたちとの連合を形成し維持しなければならない、と想定される。こうした国内の集団は、異なるタイプの対外政策の追求に物質的な利益を持ち、しばしば台頭する国家や脅威となる国家の物質的な能力の異なる構成要素に焦点を絞るという。

他国のパワーの構成要素のシフトが連合を可能とする状況下、つまり政策決定者たちと社会の主要な支持者たちとの間にコンセンサスが存在する時には、政策決定者たちは国際的な脅威認識する上で制約されない、とロベルは指摘する。脅威認識についてのコンセンサスによって、台頭する敵国や脅威となる敵国に対してより時期に適った効果的なバランス行動が可能となるという。逆に、他国のパワーの構成要素のシフトが国家安全保障政策の連合を可能としない状況下、つまり政策決定者たちと社会の主要な支持者たちの間にコンセンサスが存在しない時には、政策決定者たちは、少なからず制約を受ける、とロベルは指摘する。結果として、政策決定者たちが強力で脅威となる国家に対するバランス行動を追求する能力は、制約を受けるか、先延ばしにされるという（Lobell, 2009）。

ブラウレイは、長期のパワーのトレンドや将来の意図、同盟や対立の潜在的なパターンについて戦勝国と敗戦国の間でかなりのあいまいさが残る大國間戦争直後といった任意の国際環境の下での脅威認識と戦略的な適応のディ

レンマについて考察している。事例は、ドイツの一九二〇年代の潜在的な脅威（と一九三〇年代のより差し迫った脅威）に対応したイギリスとフランス、ソ連が直面したディレンマを取り上げる。大国間戦争直後の国際環境では、戦勝国に対する国際システムの制約は相対的により弱く、不確定であるため、いかに戦勝国が安全保障の主要な利益を定義し、短期の安全保障と長期の経済的繁栄の間でつり合いをとり、将来を予期するのかについて、かなりの選択肢があることになる。しかし、国際システムの制約が相対的により強く、国際的な脅威がより差し迫った時には、大国がとる戦略的な調整のタイプは、後の戦略的な適応に影響を及ぼさうという。

第一次世界大戦直後には、ドイツのワイマール共和国が近い将来にさらなる紛争に乗り出す立場にはないという事実に加えて、第一次世界大戦のトラウマとコストが、イギリスとフランス、ソ連の戦略的思考を形成した、とブラウレイは指摘する。イギリスとフランス、ソ連の政策決定者たちは、さまざまな長期の勢力均衡と抑止の戦略を考慮した。さらに、すべての政策決定者たちが、次の大国間戦争が勃発した場合には、自らの経済を戦時体制へと転換するにはかなりの時間と努力を必要とする、と認識していたという。ドイツのパワーにbalancing行動をとるための時間枠への期待と経済力を軍事力に転換する上での困難さについての前提は、一九二〇年代のイギリスとフランス、ソ連の政策決定に影響を及ぼしたのである。ドイツの脅威が差し迫ったものではなかったため、イギリスとフランス、ソ連の政策決定者たちは、同じ目的を達成するために異なる戦略をとることとなった。大国間戦争直後という任意の国際環境の下では、これら戦勝国の選好は、ネオリアリストに無視されるが、ネオクラシカル・リアリズムが重視する要因を反映していたという。

一九三〇年代にドイツがパワーを回復すると、イギリスとフランス、ソ連の政策決定者たちは、ドイツの脅威にbalancing行動をとる必要がある時間の展望を再評価し、それまでと異なる戦略を志向するようになった。しかし、一九二〇年代のこれら大国の決定は、一九三〇年代にとるべき政策と矛

盾する立場にこれら大国を追い込んでいく。こうして、ドイツのパワーにバランシング行動をとるイギリスとフランス、ソ連の失敗は、ドイツの脅威の性質や地政学的な位置についての不一致や誤認というよりも、変化する長期の戦略を描く困難さに起因するのである、とブラウレイは結論づける (Brawley, 2009)。

ステーリング・フォルカーは、相互依存論やネオリベラル制度論、平和の配当論といったリベラリズムが、ナショナリズムや単独主義 (unilateralism) の役割をまったく無視するか、これらをより制度化された協調を通じて克服されるべき非合理的な「歴史の遺物」とみなしている、と批判する。結果として、リベラリズムは、いかに国家や指導者たちが価値ある貿易パートナーであり、同時に安全保障上の脅威でもありとお互いを認識するのかを説明できないという。ステーリング・フォルカーによれば、ネオクラシカル・リアリズムは、集団意識の普遍性と対立する集団の中心性についてのリアリストのコアな前提に基づいているため、こうした見せかけのパラドクスを説明できるものである。集団や国家のアイデンティティの相違は、国民国家の国内政治と対外政策で永続する影響を及ぼす、と想定される。国家が国際レベルで希少な資源の配分をめぐるお互いに張り合うように、それぞれの国内では、異なる集団が希少な資源の配分をめぐる、また誰が国家のためにこうした決定を行うのかをめぐるお互いに競争するという。国家間の競争は国内の競争に影響を及ぼし、その逆も真であるため、両者を切り離して考えることはできない、というのである。ステーリング・フォルカーは、こうした枠組みの有用性を明らかにするために、アメリカと中国、台湾の間の戦略的な関係を事例研究している (Sterling-Folker, 2009a)。

歴代の大統領は、海外で主要な軍事介入に従事してきたが、既存の理論によるこうした介入の説明はしばしば、第三イメージ (国際システム・レベル) が第二イメージ (ユニット・レベル) の要因を強調する。デュエックは、いかにして、なぜ、どの程度まで、国内政治が対外介入の政策を形成する上で重要であるか明らかにするために、ネオクラシカル・リアリズムの理論を

提唱する。デュエックは、民主党のトルーマン政権による一九五〇年六月の朝鮮戦争への介入の決定と、民主党のジョンソン政権による一九六四年と一九六五年のヴェトナム戦争での介入の拡大の決定を事例研究としている。デュエックの理論によれば、主要な軍事介入の可能性に直面した時に、大統領は通常、自国の国益は何かを定義することから政策決定を始める。しかし、後で大統領は、国内政治のインセンティブと制約の観点から、国益の概念をいかにして最善の形で追求できるのか、検討する。こうした国内の制約のために、大統領はしばしば、ネオリアリズムの視角からは次善の策か、機能不全の政策とみなされるやり方で、対外介入のまきに行為や構想、タイミングを決定する。この意味で、国内政治は、対外介入の主要な原因ではなく、むしろ対外政策の形態に強い影響力を及ぼすものとして、「重要である」と指摘される (Dueck, 2009)。

いつ、システム上の諸力は、国家が対外行動をとる上で、国内政治よりも重要となる可能性がより増えるのであろうか？ 逆に、いつ、国内政治の制度や社会的なアクターの選好は、指導者たちが対外的な環境に反応する上で制約する要因となるのか？ リップスマンは、ネオクラシカル・リアリズムが説明できる範囲を設定し、国内レベルと国際システム・レベルの要因が独立変数としてどちらかが相対的により重要かを明らかにしようと試みる。リップスマンは、二〇世紀のイギリスとフランス、アメリカ、ソ連、トルコ、イスラエル、エジプトの対外政策を事例として取り上げている。リップスマンは、概して、より影響力が強い国内のアクターは、(投票や立法府による不信任投票、クーデターなどを通じて) 国家の指導者たちを政権から排除する十分な力を持つアクターや、政府の政策の目的を妨害する「拒否権を持つプレーヤー」として行動できるアクター、あるいは国益の定義を形成できるアクターである、と仮定する。こうした国内のアクターは、国際的な脅威のレベルが低く、指導者たちが弱い権力を持ち、国家安全保障の政策決定者たちが構造的な自律性が欠如する時に、対外政策や国家政策の形成で重要な影響力をますます行使しうる。しかし、ネオクラシカル・リアリズムは、概し

て、国内のアクターは、国益の基本的な定義そのものというよりも、国家安全保障政策のタイミングやスタイルに影響力をより行使しうる、と指摘される（Lipsman, 2009）。

脅威の評価や戦略的な適応は、国際的な脅威や機会が不明瞭ではなく、エリートのコンセンサスが取り組むべき適切な対外戦略や軍事戦略について存在する場合でさえ、本来的に困難なプロセスである。しかし、国家は依然として、自らの社会の物的・人的資源を抽出し、それらを国家安全保障の目的を追求する上でかなり重要な経済力や軍事力に転換するために、かなり重要な課題に直面する。ネオクラシカル・リアリズムは、国家の資源を抽出し動員する能力を国際システム上の制約と国家が追求する実際の対外政策や防衛政策との間の重要な媒介変数として想定する。しかし、資源を抽出し動員する能力は、ただ国家の官僚による機能や、政治体制の力の基盤の構成についての機能だけではない。これら国内制度の要因に加えて、イデオロギーやナショナリズムといった観念上の要因も、指導者たちが社会の資源を抽出し動員して、それらを力に転換する上で、また権力基盤の間で支持をとりつける上で、重要な役割を果たしうる。タリアフェッロやシュウェラーは、国内制度やナショナリズム、政治的なイデオロギーが国家安全保障のために国家の資源を抽出し動員する能力や結果として国家が追求する国家安全保障政策のタイプを制約し、あるいは促進する上で、相互作用するプロセスを解明している（Taliaferro, 2009; Schweller, 2009）。

いかなる環境の下で、国家は、より強力な国家の成功している軍事制度や統治の仕方、技術を模倣するのであろうか？ 同じような国際環境の脅威に直面した場合に、なぜ模倣する国家もあれば、模倣することに失敗する国家もあるのか？ いかなる環境の下で、国家は、ライバル国家の認識された優位（primacy）を相殺しようと努力する上で、まったく新しい軍事制度や実践、技術を生み出すのであろうか？ ネオリアリズムの勢力均衡の理論は、国際システムの構造の制約によって、国家は同質の適応の戦略、すなわちバラランシング行動と模倣の政策をとる（さもなければ、独立した存在として除

去されるリスクを負うことになる)、と主張する。しかし、実際には、国家は常に、国際システム上の指導国の成功した実践をタイミングよく統一されたやり方で模倣するわけではない。さらに、国家は、既存の安全保障戦略に固執したり、まったく新しい軍事的な実践やドクトリン、技術、制度を生み出したりして、対外的な脅威に対応することもある。

こうした問いに対して、タリアフェッコは、ネオクラシカル・リアリズムの理論から、「資源抽出」のモデルを提唱する。対外的な脆弱性は、国家にとって他国の実践を模倣させたり、イノベーションのような実践で対抗したりするインセンティブとなりうる。しかし、ネオクラシカル・リアリズムは、国家が国内社会から資源を抽出し動員する相対的な能力として定義される国家のパワーは国家が追求するであろう国内バランスの戦略を形成する、と想定する。また国家のパワーは、ナショナリズムやイデオロギーだけでなく、国家の政治・軍事の制度の機能でもある。

タリアフェッコは、国家がより高度な資源の抽出・動員能力を持つが、対外的な脆弱性が高い場合には、少なくとも短期的には、国際システムで最も強力な国家の軍事的な実践や統治の実践、技術的な実践を模倣する可能性はより高い、と指摘する。他方で、国家が低い資源の抽出・動員能力しか持たないが、対外的な脆弱性が高い場合には、少なくとも短期的には、模倣の政策を追求する上で、より大きな困難に直面するであろうという。国家がより高度な資源の抽出・動員能力を持つが、対外的な脆弱性が低い場合には、長期的な安全保障や国家のパワーを強化するためにイノベーションを追求する自由を持つ、と想定される。逆に、国家が低い資源の抽出・動員能力しか持たないが、対外的な脆弱性が低い場合には、模倣やイノベーションの政策を追求する可能性は低くなるという。長期的に、国家は、ナショナリズムや国家のイデオロギーに依拠することによって、自らの資源を抽出し動員する能力を向上させ、結果として、模倣やイノベーションの政策を追求する能力を高めるようと試みるからである。しかし、ナショナリズムの感情の欠如や反国家のイデオロギーは、国家が模倣したり、イノベーションを起こしたりす

る能力を制約することになる。こうした環境の下では、脆弱な国家は、既存の戦略に固執する可能性が高いという (Taliaferro, 2009)。

シュウェラーは、若干異なった視角から、資源の抽出・動員の問題に取り組んでいる。なぜ、近代の大国による領土の支配や地域覇権を追求する企ては、相対的に希少なのか？ シュウェラーはこう問うが、攻撃的リアリズムは、国際システム・レベルの構造の制約によって、あらゆる大国は国家安全保障ため相対的なパワーの極大化を図る、と想定する。ミアシャイマーによれば、歴史を通じて、大国は地域覇権を追求してきたし、これからも領土の支配を拡大し、潜在的なライバル国家をより弱体化させようと試みるであろうという。しかし、シュウェラーによれば、二〇世紀に入り、ドイツやイタリア、日本だけが、領土の拡大のために計画的な企てを開始した、と指摘される。

シュウェラーは、より優位な勢力均衡や国際システム上の機会にもかかわらず、大国が地域覇権の機会を差し控える環境の下での不完全な攻撃 (under-aggression) や不完全な拡大 (under-expansion) の減少を説明するために、ネオクラシカル・リアリズムの理論を提唱する。攻撃的リアリズムや勢力均衡もしくは脅威の均衡の理論の論理とは異なり、シュウェラーは、地域覇権を追求する上での障害は敵対する大国による抑止ではなく、むしろ現状変革国家 (もしくはその指導者たち) が地域覇権国になるために必要な国内資源を抽出し動員する上での困難な状況にある、と指摘する。さらに、国家の指導者たちは、拡張的でリスクをとまなう対外政策の企てのために国民の支持を集め、維持する手段として、勢力均衡の論理への訴えを利用することは決してできないという。代わりに、シュウェラーによれば、地域覇権の企てのために必要な資源の抽出・動員にとって鍵となるのは、大衆政治の時代には、国家の指導者たちが拡張的な対外政策の企てのための支持を動員する能力にある、と主張される。いかなるイデオロギーよりも、ファシズムは、可能であれば国家は拡大すべきであるという信念を実行に移すために必要な政治的かつイデオロギーを提供した。さまざまなマニフェストで表現さ

れたナチズムやファシズムのイデオロギーは、一九三〇年代のドイツとイタリア、日本に、全体戦争のために必要な政治的な支持と資源を動員するための伝達手段を提供したという。シュウェラーは、ナチズムやファシズムを擁護しているわけではない。しかし、ドイツとイタリア、日本のナチズムやファシズムの社会ダーウィニズムや人種差別の意識は、(ドイツの) 大虐殺や戦争犯罪、無謀なグランド・ストラテジーの追求のためにイデオロギー上の正当化の論理を提供したことは間違いない、と指摘される (Schweller, 2009)。

フレイバーグ＝イナンとハリソン、ジェイムズ編集の論文集も (Freyberg-Inan, Harrison, and James, eds., 2009)、ネオクラシカル・リアリズムの論文をいくつか所収している。デヴレンとオズダマルはネオクラシカル・リアリズムの視角から対外政策の危機を議論し (Devlen and Ozdamar, 2009)、レインはネオクラシカル・リアリズムの視角からグランド・ストラテジーを論じ (Layne, 2009)、ステアリング＝フォルカーはリアリズムの伝統の視角からネオクラシカル・リアリズムを評価した (Sterling-Folker, 2009b)。構造的リアリズムを超えたりアリズムの理論的發展を知る上でも有益である (Little, 2009; James, 2009; Elman, 2009; Harrison, 2009; Rosow, 2009)。

トジェとカンズ編集の論文集『ヨーロッパ政治におけるネオクラシカル・リアリズム』も、興味深い論文がいくつも所収されている。たとえば、レイチウエインはヨーロッパ政治にネオクラシカル・リアリズムの伝統を見い出し (Reichwein, 2012)、パティステッラはフランスの国際政治学者のアロンにネオクラシカル・リアリズムの原型を見る (Dario Battistella, 2012)。ベレンスコッターとパヴロヴァは、論文「招かれた覇権」で、米欧関係をネオクラシカル・リアリズムとソフト・パワーの観点から捉え直す (Romanova and Pavlova, 2012)。トジェとカンズによれば、二一世紀の国際秩序が単極から多極へと移行しつつある状況下で、リアリズムが復権しつつあるという (Toje and Kunz, 2012: 1-2)。冷戦後の単極の国際システムは、新しい国際秩序への移行期と捉えられる。また、ネオクラシカル・リアリズムのアプロー

変化するリアリズム—ネオクラシカル・リアリズムの“発見”（下）

チは、アメリカに特有のものではなく、ヨーロッパのリアリズムの伝統とも無関係ではない、と指摘される（Toje and Kunz, 2012: 5-10）。また注目すべきことに、ヨーロッパの視角から見れば、ネオクラシカル・リアリズムのアプローチは、古典的リアリズムの復権というよりは、「ネオ・ネオリアリズム（neo-neorealism）」のアプローチの再構築であるという（Toje and Kunz, 2012: 8）。トジェとカンズによれば、ネオクラシカル・リアリズムのアプローチには、科学的なパラダイムを志向する立場と、哲学的な伝統を重視する立場があるという。トジェとカンズは、ロベルとリップスマン、タリアフェッロ編集の論文集のように、前者をより重視するアメリカのネオクラシカル・リアリズムのアプローチには批判的で、カーやモーゲンソー、アロンなどの古典的リアリズムを読み直す必要性を説く。トジェとカンズは、ローズ論文から以下の下りを引用する。

ネオクラシカル・リアリズムは、国家が安全保障を追求すると仮定するのではなく、対外的な環境を管理し、形成することによって、国際的な無政府状態の不確実性に対応すると想定する。この学派は、国家が自らの利益を定義する多数の方法があるにもかかわらず、国家はより低い対外的な影響力というよりもむしろより強い対外的な影響力を望み、できる限りの影響力を追求すると論じる（Rose, 1998: 152）。

ネオクラシカル・リアリズムの研究動向は、こうした論文集だけに留まらない。

たとえば、ブラウレイは、グランド・ストラテジーの政治経済の歴史をネオクラシカル・リアリズムの観点から読み解く（Brawley, 2010）。ハッドフィールド・アムカンは、イギリスの対外政策を国家アイデンティティとパワーの観点から描く（Hadfield-Amkhan, 2010）。ダイソンは、冷戦後のヨーロッパにおける防衛改革をネオクラシカル・リアリズムの視角から分析する（Dyson, 2010）。市原麻衣子は、日本のソフト・パワーとしての民主化支援

をネオクラシカル・リアリズムのアプローチで議論する (Ichihara, 2017)。ロサは、中国の核ドクトリンの低開発をネオクラシカル・リアリズムの観点から明らかにしようと試みる (Rosa, 2018)。リップスマンとタリアフェッロ、ロベルによる『国際政治のネオクラシカル・リアリストの理論』は、今のところ、最も信頼できる研究書の一つである (Ripsman, Taliaferro, and Lobell, 2016)。

七 なぜネオクラシカル・リアリズムは注目されるのか

なぜネオクラシカル・リアリズムが、注目されるようになったのか。リアリズムの変遷とともに、改めて簡潔に振り返ってみよう。

ウォルツが指摘するように、古典的リアリズムは還元主義であり、論理が循環してしまう。このため、古典的リアリズムは説明要素が豊富である一方で、方法論上の問題点を抱えていた。また、古典的リアリズムは、国内要因や個人レベルの要因から国際政治を説明することを試みたものであるため、同じ国際環境に置かれた二つの国家の対外政策が異なる理由は説明できたとしても、同じような国内政治状況に置かれた場合で国家の対外政策が異なることが説明できない。

ネオリアリズムは、国際システム・レベルの構造的要因から国際政治の説明を試みるアプローチであり、ウォルツの一九七九年の『国際政治の理論』によってリアリズムが再考された。背景には、米ソ・デタントの後退ともなう国際環境の緊張があった。特にウォルツのネオリアリズムの理論は、国際システムの構造に注目し、変数が少なく (パーシモニアスと言う)、その後のネオリアリズム (とネオリベラリズム) の理論の発展に寄与したと言ってよい。しかし、ネオリアリズムは、国際システムの観点から、特定の国家の対外政策が説明できないし、そもそも論として特定の国家の対外政策を分析することを念頭に置いていない。この点は、ウォルツ自身も認めている。ミアシャイマーも、国際システム以外の要因が国家の対外政策を決定づける

変化するリアリズム—ネオクラシカル・リアリズムの“発見”（下）

ことがあると指摘している。このため、ネオリアリズムばかりでなく、攻撃的リアリズムにも修正が必要になるのである。

防衛的リアリズムは、ネオリアリズムの修正として、独立変数としてユニット・レベルの要因を加え、説明の範囲を広げる試みであったと言える。しかしながら、国際システム・レベルとユニット・レベルの変数の間ではどちらの優先度が高いのか、またそれに加えてそれらの変数間の相互関係がいまいであるため、防衛的リアリズムは“後づけの”理論になってしまう、という批判がある。

ネオクラシカル・リアリズムは、国際システム・レベルの要因と国内要因・個人レベルの要因との相関関係についても明らかとなっており、防衛的リアリズムの問題点として批判された“後づけの”理論とは異なる。ネオクラシカル・リアリズムは、国際システムのレベル、あるいは国内要因・個人レベルの要因のみで国家の対外政策を決定づける理論ではない。ネオクラシカル・リアリズムは、独立変数として国際システム・レベルの要因を、従属変数として特定の国家の対外政策を、そして媒介変数として国内要因・個人レベルの要因を位置づけるのである。このように、ネオクラシカル・リアリズムは、これまでのリアリズムに比べると、特定の国家の対外政策に対しての説明の幅を広げる形で理論が組まれている。

こうして、ネオクラシカル・リアリズムが“発見”された理由はいくつかあるが、最も重要な理由は、ネオリアリズムの欠陥を補うことであったと言える。国際システム・レベルの構造的要因から国際政治の説明を試みるウォルツのネオリアリズムは、厳密な意味で「国際政治の理論」、つまり国際システムを説明する理論であって、特定の国家の対外政策や特定の歴史的な出来事を説明する理論ではない、ということである。一方、ネオクラシカル・リアリズムは、国際システムを説明するような「国際政治の理論」ではなく、「対外政策の理論」であり、特定の国家の対外政策やグランド・ストラテジー、戦争など個別の歴史的な出来事を説明するために構築された理論である。このため、ネオクラシカル・リアリズムは、特定の国家の対外政策

やグラント・ストラテジー、戦争についての詳細な説明を試みるアプローチとして注目されてきた（いる）と言ってよい。

主要な参考文献:

(Books)

- Aron, Raymond (2003), *Peace and War: A Theory of International Relations*, Transaction Publishers.
- Brawley, Mark R. (2010), *Political Economy and Grand Strategy: A Neoclassical Realist View*, Routledge.
- Brown, Michael, Sean M. Lynn-Jones, and Steven E. Miller, eds. (1995), *The Peril of Anarchy: Contemporary Realism and International Security*, The MIT Press.
- Buzan, Barry, Charles Jones, and Richard Little (1993), *The Logic of Anarchy: Neorealism to Structural Realism*, Columbia University Press.
- Carr, Edward Hallett (1964 [1939]), *The Twenty Years' Crisis 1919–1939: An Introduction to the Study of International Relations*, Harper & Row, Publishers.
- Christensen, Thomas J. (1996), *Useful Adversaries: Grand Strategy, Domestic Mobilization, and Sino-American Conflict, 1947–1958*, Princeton University Press.
- Davidson, Jason W. (2006), *The Origins of Revisionist and Status Quo States*, Palgrave Macmillan.
- Doyle, Michael W. (1997), *Ways of War and Peace: Realism, Liberalism, and Socialism*, W.W. Norton.
- Dueck, Colin (2016), *Reluctant Crusaders: Power, Culture, and Change in American Grand Strategy*, Princeton University Press.
- Dyson, Tom (2010), *Neoclassical Realism and Defence Reform in Post-Cold War Europe*, Palgrave Macmillan.
- Friedberg, Aaron L. (1988), *The Weary Titan: Britain and the Experience of Relative Decline*, Princeton University Press.
- Friedberg, Aaron L. (2000), *In the Shadow of the Garrison State: America's Anti-Statism and its Cold War Grand Strategy*, Princeton University Press.
- Gaddis, John Lewis (1992), *The United States and the End of the Cold War: Implication, Reconsideration, Provocation*, Oxford University Press.
- George, Alexander and Andrew Benet (2005), *Case of Studies and Theory Development in the Social Sciences*, The MIT Press.
- Gilpin, Robert (1981), *War & Change in the World Politics*, Cambridge University Press.

- Grieco, Joseph (1990), *Cooperation among Nations: Europe, America, and the Non-Tariff Barriers to Trade*, Cornell University Press.
- Hadfield-Amkhan, Amelia (2010), *British Foreign Policy, National Identity, and Neoclassical Realism*, Rowman & Littlefield.
- Herz, John H. (1959), *International Politics in the Atomic Age*, Columbia University Press.
- Ichihara, Maiko (2017), *Japan's International Democracy Assistance as Soft Power: Neoclassical Realist Analysis*, Routledge.
- Jervis, Robert (1976), *Perception and Misperception in International Politics*, Princeton University Press.
- Jervis, Robert (1989), *The Meaning of the Nuclear Revolution: Statecraft and the Prospect of Armageddon*, Cornell University Press.
- Jervis, Robert (1996), *System Effects: Complexity in Political and Social Life*, Princeton University Press.
- Jervis, Robert (2005), *American Foreign Policy in a New Era*, Routledge.
- Jervis, Robert (2017), *How Statesmen Think: The Psychology of International Politics*, Princeton University Press.
- Joll, James and Gordon Martel (2007 [1984]), *The Origins of the First World War*, Third Edition, Pearson Longman.
- Kennedy, Robert (1989), *The Rise and Fall of the Great Powers*, Vintage Books.
- Kissinger, Henry A. (1957), *A World Restored: Metternich, Castlereagh and the Problems of Peace 1812–1822*, Houghton Miffrin.
- Layne, Christopher (2006), *The Peace of Illusions: American Grand Strategy from 1940 to the Present*, Cornell University Press.
- Lobell, Steven E., Norrin M. Ripsman, Jeffrey W. Taliaferro, eds. (2009), *Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy*, Cambridge University Press.
- Mandelbaum, Michael (1981), *The Nuclear Revolution: International Politics before and after Hiroshima*, Cambridge University Press.
- May, Ernest R. (1975), *Lessons of the Past: The Use and Misuse of History in American Foreign Policy*, Oxford University Press.
- McAlliser, James (2002), *No Exit: America and the German Problem, 1943–1954*, Cornell University Press.
- Mearsheimer, John (2014 [2001]), *The Tragedy of Great Power Politics*, Updated Edition, W.W. Norton & Company.
- Miller, Benjamin (1995), *When Opponents Cooperate*, University of Michigan Press.
- Morgenthau, Hans J. (1948), *Politics among Nations: The Struggle for Power and Peace*, Alfred A. Knopf.
- Morgenthau, Hans J. (1978 [1948]), *Politics among Nations: The Struggle for Power and*

- Peace*, Fifth Edition, Revised, Alfred. A. Knopf.
- Ripsman, Norrin M. (2002), *Peacemaking by Democracies: The Effects of State Autonomy on the Post-World War Settlements*, Pennsylvania University Press.
- Ripsman, Norrin M., Jeffrey W. Taliaferro, Steven E. Lobell (2016), *Neoclassical Realist Theory of International Politics*, Oxford University Press.
- Rosa, Paolo (2018), *Neoclassical Realism and the Underdevelopment of China's Nuclear Doctrine*, Palgrave Macmillan.
- Rose, Gideon (2010), *How Wars End: Why We Always Fight the Last Battle: A History of American Intervention from World War I to Afghanistan*, Simon & Schuster Paperbacks.
- Russett, Bruce (1993), *Grasping the Democratic Peace: Principles for a Post-Cold War World*, Princeton University Press.
- Russett, Bruce and John Oneal (2001), *Triangulating Peace: Democracy, Interdependence, and International Organizations*, W.W. Norton & Company.
- Schweller, Randall L. (1998), *Deadly Imbalances: Tripolarity and Hitler's Strategy of World Conquest*, Columbia University Press.
- Schweller, Randall L. (2006), *Unanswered Threats: Political Constraints on the Balance of Power*, Princeton University Press.
- Snyder, Glenn H. (1997), *Alliance Politics*, Cornell University Press.
- Sterling-Folker, Jennifer (2002), *Theories of International Cooperation and the Primacy of Anarchy: Explaining US International Monetary Policy-Making after Bretton Woods*, State University of New York Press.
- Taliaferro, Jeffrey W. (2004), *Balancing Risks: Great Power Intervention in the Periphery*, Cornell University Press.
- Toje, Asle and Barbara Kunz, eds. (2012), *Neoclassical Realism in European Politics: Bringing Power Back in*, Manchester University Press.
- Walt, Stephen M. (1987), *The Origin of Alliances*, Cornell University Press.
- Walt, Stephen M. (2005), *Taming American Power: The Global Response to U.S. Primacy*, W.W. Norton & Company.
- Waltz, Kenneth N. (1967), *Foreign Policy and Domestic Politics: The American and British Experience*, Institute of Governmental Studies Press.
- Waltz, Kenneth N. (1979), *Theory of International Politics*, McGraw-Hill.
- Wohlforth, William C. (1993), *The Elusive Balance: Power and Perceptions During the Cold War*, Cornell University Press.
- Wolfers, Arnold (1956), *The Anglo American Tradition in Foreign Affairs: Readings from Thomas More to Woodrow Wilson*, Elliotts Books.
- Wolfers, Arnold (1962), *Discord and Collaboration: Essays on International Politics*,

- Johns Hopkins University Press.
- Wolfers, Arnold (1966), *Britain and France Between Two Wars: Conflicting Strategies of Peace from Versailles to World War II*, W. W. Norton & Company.
- Wolfers, Arnold (1976), *Alliance Policy in the Cold War*, Praeger Publishers.
- Zakaria, Fareed (1998), *From Wealth to Power: The Unusual Origins of America's World Role*, Princeton University Press.
- Zakaria, Fareed (2017), *The End of the Liberal Order?*, Oneworld.

(Articles)

- Battistella, Dario (2012), “Raymond Aron: A Neoclassical Realist before the Term Existed?” Asle Toje and Barbara Kunz, eds., *Neoclassical Realism in European Politics: Bringing Power Back in*, Manchester University Press, pp. 117–137.
- Berenskoetter, Tatiana and Elena Pvlova (2012), “Hegemony by Invitation: Neoclassical Realism, Soft Power and US-European Relations,” Asle Toje and Barbara Kunz, eds., *Neoclassical Realism in European Politics: Bringing Power Back in*, Manchester University Press, pp. 182–213.
- Brawley, Mark R. (2009), “Neoclassical Realism and Strategic Calculations: Explaining Divergent British, French, and Soviet Strategies toward Germany between the World Wars (1919–1939),” Steven E. Lobell, Norrin M. Ripsman, Jeffrey W. Taliaferro, eds., *Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy*, Cambridge University Press, pp. 75–98.
- Brooks, Stephen G. and William C. Wohlforth (2000/ 2001), “Power, Globalization, and the End of the Cold War: Re-Evaluating a Landmark Case for Ideas,” *International Security*, Vol. 25, No. 3, pp. 5–53.
- Byman, Daniel L. and Kenneth M. Pollack (2001), “Let Us Now Praise Great Men: Bringing the Statesman Back In,” *International Security*, Vol. 25, No. 4, pp 107–146.
- Cha, Victor D. (2002), “Hawk Engagement and Preventive Defense on the Korean Peninsula,” *International Security*, Vol. 27, No.1, pp. 40–78.
- Christensen, Thomas J. (1997), “Perceptions and Alliance in Europe, 1980–1940,” *International Organization*, Vol. 51, No. 1, pp. 65–97.
- Cox, Robert W. (1986), “Social Forces, States, and World Orders: Beyond International Relations Theory,” Robert O. Keohane, ed., *Neorealism and its Critics*, Columbia University Press, 204–254.
- Desch, Michael C. (2006), “War and Strong, Peace and Weak States?” *International Organization*, Vol. 50, No. 2, esp. pp. 904–905.
- Doyle, Michael (1983a), “Kant, Liberal Legacies, and Foreign Affairs, part 1,” *Philosophy and Public Affairs*, Vol. 12, No. 3, pp. 205–235.

- Doyle, Michael (1983b), "Kant, Liberal Legacies, and Foreign Affairs, part 2," *Philosophy and Public Affairs*, Vol. 12, No. 4, pp. 1151-1161.
- Dueck, Colin (2009), "Neoclassical Realism and the National Interest: Presidents, Domestic Politics, and Major Military Intervention," Steven E. Lobell, Norrin M. Ripsman, Jeffrey W. Taliaferro, eds., *Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy*, Cambridge University Press, pp. 139-169.
- Fordham, Benjamin O. (2009), "The Limits of Neoclassical Realism: Additive and Interactive Approaches to Explaining Foreign Policy," Steven E. Lobell, Norrin M. Ripsman, Jeffrey W. Taliaferro, eds., *Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy*, Cambridge University Press, pp. 251-279.
- Gegout, Catherine (2012), "Explaining European Military Intervention in Africa," Asle Toje and Barbara Kunz, eds., *Neoclassical Realism in European Politics: Bringing Power Back in*, Manchester University Press, pp. 138-160.
- Glaser, Charles L. (1994/1995), "Realists as Optimists: Cooperation as Self-Help," *International Security*, Vol. 19, No. 3, pp. 50-90.
- Haine, Jean-Yves (2012), "The Rise and Fall of the Common Security and Defence Policy: Bringing Strategic Culture Back in," Asle Toje and Barbara Kunz, eds., *Neoclassical Realism in European Politics: Bringing Power Back in*, Manchester University Press, pp. 182-213.
- Holden, Patrick (2012), "Looking After the 'European' Interest? Neoclassical Realism and the European Union's Engagement with Sub-Saharan Africa," Asle Toje and Barbara Kunz, eds., *Neoclassical Realism in European Politics: Bringing Power Back in*, Manchester University Press, pp. 161-181.
- Jervis, Robert (1978), "Cooperation under the Security Dilemma," *World Politics*, Vol. 30, No. 2, pp. 167-214.
- Kahler, Miles (1998), "Rationality in International Relations," *International Organization*, Vol. 52, No. 4, pp. 919-941.
- Kaufmann, Chaim (2004), "Threat Inflation and Failure of the Marketplace for Ideas: The Selling of the Iraq War," *International Security*, Vol. 29, No.1, pp. 112-156.
- Kitchen, Nicolas (2012), "Idea of Power and the Power of Ideas," Asle Toje and Barbara Kunz, eds., *Neoclassical Realism in European Politics: Bringing Power Back in*, Manchester University Press, pp. 79-95.
- Kunz, Barbara and Ilai Z. Saltzman (2012), "External and Domestic Determinants of State Behavior," Asle Toje and Barbara Kunz, eds., *Neoclassical Realism in European Politics: Bringing Power Back in*, Manchester University Press, pp. 96-116.
- Legro, Jeffrey W. and Andrew Moravcsik (1999), "Is Anybody Still a Realist?" *International Security*, Vol. 24, No. 2, pp. 5-55.

- Lobell, Steven E. (2009), “Threat Assessment, the State, and Foreign Policy: A Neoclassical Realist Model,” Steven E. Lobell, Norrin M. Ripsman, Jeffrey W. Taliaferro, eds., *Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy*, Cambridge University Press, pp. 42-74.
- Mearsheimer, John J. (1990), “Back to the Future: Instability in Europe after the Cold War,” *International Security*, Vol. 15, No. 1, pp. 5-56.
- Monten, Jonathan (2005), “The Roots of the Bush Doctrine: Power, Nationalism, and Democracy Promotion in Grand Strategy,” *International Security*, Vol. 29, No.4, pp. 112-156.
- Moravcsik, Andrew (1997), “Taking Preference Seriously: A Liberal Theory of International Politics,” *International Organization*, Vol. 51, No. 4, 513-553, esp., 516-520.
- Narizny, Kevin (2017), “On Systemic Paradigms and Domestic Politics: A Critique of the Newest Realism,” *International Security*, Vol. 42, No. 2, pp. 155-190.
- Putnam, Robert D. (1993), “Diplomacy and Domestic Politics: The Logic of Two-Level Games,” Peter B. Evans, Harold K. Jacobson, and Robert D. Putnam, eds. *Double-Edged Diplomacy: International Bargaining and Domestic Politics*, University of California Press, pp. 431-468.
- Reichwein, Alexander (2012), “The Tradition of Neoclassical Realism,” Asle Toje and Barbara Kunz, eds., *Neoclassical Realism in European Politics: Bringing Power Back in*, Manchester University Press, pp. 30-60.
- Ripsman, Norrin M. (2009), “Neoclassical Realism and Domestic Interest Groups,” Steven E. Lobell, Norrin M. Ripsman, Jeffrey W. Taliaferro, eds., *Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy*, Cambridge University Press, pp. 170-193.
- Ripsman, Norrin M., Jeffrey W. Taliaferro, and Steven E. Lobell (2009), “Conclusion: The State of Neoclassical Realism,” Steven E. Lobell, Norrin M. Ripsman, Jeffrey W. Taliaferro, eds., *Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy*, Cambridge University Press, pp. 280-299.
- Romanova, Tatiana and Elena Pavlova (2012), “Towards Neoclassical Realist Thinking Russia?” Asle Toje and Barbara Kunz, eds., *Neoclassical Realism in European Politics: Bringing Power Back in*, Manchester University Press, pp. 234-254.
- Rose, Gideon (1998), “Neoclassical Realism and Theories of Foreign Policy,” *World Politics*, Vol. 51, pp. 144-172.
- Ruggie, John Gerald (1986), “Continuity and Transformation in the World Polity: Toward a Neorealist Synthesis,” Robert O. Keohane, ed., *Neorealism and its Critics*, Columbia University Press, pp. 131-157.
- Schmidt, Brian and Thomas Juneau (2012), “Neoclassical Realism and Power,” Asle Toje

- and Barbara Kunz, eds., *Neoclassical Realism in European Politics: Bringing Power Back in*, Manchester University Press, pp. 61–78.
- Schweller, Randall L. (1994), “Bandwagoning for Profit: Bringing the Revisionist State Back In,” *International Security*, Vol. 19, No. 1, pp. 72–107.
- Schweller, Randall L. (1997), “New Realist Research on Alliances: Refining, Not Refuting Waltz’s Balancing Proposition,” *American Political Science Review*, Vol. 91, No. 4, esp. pp. 927–930.
- Schweller, Randall L. (1999), “Realism and the Present Great Power System: Growth and Positional Conflict over Scarce Resources,” Ethan B. Kapstein and Michael Mastanduno, eds., *Unipolar Politics: Realism and State Strategies after the Cold War*, Columbia University Press, pp. 28–68.
- Schweller, Randall L. (2001), “The Twenty Year’s Crisis, 1919–39: Why a Concert Didn’t Arise,” Colin Elman and Miriam Fendius Elman, eds., *Bridges and Boundaries: Historians, Political Scientists, and the Study of International Relations*, The MIT Press, pp. 181–212.
- Schweller, Randall L. (2003), “The Progressiveness of Neoclassical Realism,” Colin elman and Miriam Fendius Elman, eds., *Progress in International Relations Theory: Appraising the Field*, The MIT Press, pp. 311–347.
- Schweller, Randall L. (2009), “Neoclassical Realism and State Mobilizations: Expansionist Ideology in the Age of Mass Politics,” Steven E. Lobell, Norrin M. Ripsman, Jeffrey W. Taliaferro, eds., *Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy*, Cambridge University Press, pp. 227–250.
- Snyder, Glenn H. (1984), “The Security Dilemma in Alliance Politics,” *World Politics*, Vol. 36, No. 4, pp. 461–495.
- Sterling-Folker, Jenifer (1997), “Realist Environment, Liberal Process, and Domestic-Level Variables,” *International Studies Quarterly*, Vol. 41, No. 1, 1–25.
- Sterling-Folker, Jenifer (2002), “Realist-Constructivism Challenge: Rejecting, Reconstructing, or Rereading,” *International Studies Review*, Vol. 4, No. 1, pp. 73–94.
- Sterling-Folker, Jenifer (2004), “Realist-Constructivism and Morality,” *International Studies Review*, Vol. 6, No. 2, esp. pp. 341–343.
- Sterling-Folker, Jenifer (2009), “Neoclassical Realism and Identity: Peril despite Profit across the Taiwan Strait,” Steven E. Lobell, Norrin M. Ripsman, Jeffrey W. Taliaferro, eds., *Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy*, Cambridge University Press, pp. 99–138.
- Taje, Asle and Barbara Kunz (2012), “Introduction: Neoclassical Realism in Europe,” Asle Toje and Barbara Kunz, eds., *Neoclassical Realism in European Politics:*

変化するリアリズム—ネオクラシカル・リアリズムの“発見” (下)

- Bringing Power Back in*, Manchester University Press, pp. 1–16.
- Taje, Asle and Barbara Kunz (2012), “Conclusion: The Future of Neoclassical Realism in Europe,” Asle Toje and Barbara Kunz, eds., *Neoclassical Realism in European Politics: Bringing Power Back in*, Manchester University Press, pp.
- Taliaferro, Jeffrey W., Steven E. Lobell, and Norrin M. Ripsman (2009), “Introduction: Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy,” Steven E. Lobell, Norrin M. Ripsman, Jeffrey W. Taliaferro, eds., *Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy*, Cambridge University Press, pp. 1–41.
- Torbjorn L. Knutsen (2012), “Realism: A Distinctively European Academic Tradition,” Asle Toje and Barbara Kunz, eds., *Neoclassical Realism in European Politics: Bringing Power Back in*, Manchester University Press, 2012, pp. 17–29.
- Taliaferro, Jeffery W. (2009), “Neoclassical Realism and Resource Extraction: State Building for Future War,” Steven E. Lobell, Norrin M. Ripsman, Jeffrey W. Taliaferro, eds., *Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy*, Cambridge University Press, pp. 194–226.
- Waltz, Kenneth N. (1986), “Reflections on Theory of International Politics: A Response to My Critics,” Robert O. Keohane ed., *Neorealism and Its Critics*, Columbia University Press, esp. pp. 328, 339–340.
- Waltz, Kenneth N. (1993), “The Emerging International Structure of International Politics,” *International Security*, Vol. 18, No. 2, pp. 44–79.
- Waltz, Kenneth N. (1996), “International Politics is Not Foreign Policy,” *Security Studies*, Vol. 6, No. 1, esp. pp. 54–57.
- Wohlforth, William C. (1999), “The Stability of a Unipolar World,” *International Security*, Vol. 21, No. 1, pp. 1–36.
- Wohlforth, William C. (2002), “US Strategy in a Unipolar World,” G. John Ikenberry, ed., *America Unrivaled: The Future of the Balance of Power*, Cornell University Press.

(本)

エルマン、コリン、ミリアム・フェンディアス・エルマン (二〇〇三) (渡辺昭夫。宮下明聡、野口和彦、戸谷美苗、田中康友訳) 『国際関係研究へのアプローチ—歴史学と政治学の対話』東京大学出版会。

(論文)

芝崎厚士 (二〇〇〇) 「国際問題文献紹介 (ネオクラシカル・リアリズムと対外政策の理論)」『国際問題』第四八二号、八〇–八二頁。

『日本経済新聞』二〇一二年九月三〇日朝刊

<https://www.nikkei.com/article/DGXZDZ046698600Z20C12A9MZA001/>